

《以下文「現代文學(B)存立の爲に」の圖形化》「」内が恒存文。( )内は吉野注・・・「もし今日においても、なほおなじ宿命[とは『文學(B)を棄てるべき時代にこれ(B)に固執]]の流れに棹さすとするならば、(『明治の先輩』の犠牲と同様)ぼくたちはまづぼくたちの生活(A)を犠牲(A⇒B文學:滑り込み)に供せねばならぬ。そしてこの否定的逆説[とは『文學(B)を棄てるべき時代に文學(B)に固執するなら』、『ぼくたちの生活(A)を犠牲(A⇒B文學:滑り込み)に供せねばならぬ]]を意識するところ(實行ではなく)に現代がある。が、問題はそれだけではない——逆説の意識[赤字傍線部分]がなにを生みうるか、いかなる美(B⇒C:藝術)を定着しうるか。もしそれが不可能ならばぼくたちのことば(藝術B・文學B的手段)も生活(A)もすべて抹殺されなければならぬ(有るのは只の肉體的棲息)。(中略)「今日の現實をまへにして、文學(B)に固執するなら」、『明治先輩』の良心の呵責(即ち「政治經濟再建:A'⇒A」放棄の後ろめたさ)を、「個人の純粹性B」として)今後も保持しなければならない、この(今後も保持の)宿命に據る以外に、現代文學(B)は存立しえぬ」(『文學(B)に固執する心』抜粋・簡略文)。

